


























名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
衣の用具											
長井垂弓											
被り物											
 てぬぐい 手拭	頭部の鉢（頭開）に手拭や布などを巻く習俗。女性は手拭を開いたまま頭髪を包む「手拭かぶり」、男性は手拭を細く折って頭の鉢に巻き結ぶ「鉢巻」として使用。頭髪の乱れを防ぐために、布などで包んだり縛ったりしたことがはじまりとされる。	テヌグイ			テノゴイ	テノゴイ	テヌグイ、 テノゴイ、 ユテ	チヨノガ、 テヌグ	ディーサー シ	【手拭】 いじえ・いて・えちや・いちや・えて・えもみ・いもみ・さじ・さす・しだ・いでい・しゃつらぜーきん・すほど・たな・ちゃきん・ちゃけん・つらのげ・つらふき・ていーさーじ・ていーさじ・ていーざし・ていーさんつい・ていざんていー・ていさじ・ていさすい・てきんでていー・てふきん・てんでこ・てなぐるみ・ふきんの・ゆいて・ゆちえ・ゆいて・ゆてー・ゆてん・ゆーとい・ゆつけ・ゆっけ・ゆて・ゆで・ゆてー・ゆてん・ゆとり・ゆもみ・よてー・よてよで 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【手拭】 さじ・ちゃけん・てーさじ・てさす・ゆずい・たな・ゆてさす 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 はちまき 鉢巻	頭部の鉢（頭開）に巻く布の結び方、また、その布。前額部で結ぶのを向鉢巻、後頭部で結ぶのを後鉢巻、しごいて撚りをかけて前額部に挟みこんだものをねじり鉢巻などという。				ハチマキ	ネジリハチマキ、ホオカマリ	ネジリハチマキ、ホオカマリ	ハチマキ		【鉢巻】 さーじ・さーいでいー・さじ・さんつい 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【鉢巻】 さじ・ちゃけん・てーさじ・てさす・ゆずい・たな・ゆてさす 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 たな	帯状の被り物。目を避けて顔に巻き付けて着装する。タナはタツナ（手綱）の転訛もしくははタナコビ（手拭）の下略という説もある。								x	【タナ】 ヒロタナ、ナガタナ（ナガテヌグ）、ハンコタナ（ハナガオ・ハナケ）以上、『かぶりもの、きもの、はきもの』（宮本馨太郎）	
 ずきん 頭巾	頭や面部を覆う布製の被物。布帛を円形に縫ったもの、円形に縫って鍔（しころ）を付したもの、円形に縫って覆面を施したもの、着物（小袖）の袖状になったもの、風呂敷様の布帛で包むものなど多様な種類がある。 屋外作業用の頭巾のうち、ドモコモ（供薦）・サントク（三徳）・カガボシ（加賀帽子）は、主に秋田・山形・新潟などの日本海側の諸県下で、女性が被ったもの。新潟県下ではヤマボシ・マルボシ・オカブリ、秋田県下ではマドボッチなども呼ばれる。	プシ			ズキン	ズキン	ズキン	ズキン	x	【頭巾】 てっぺんぶくる 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編） 【ドモコモ、サントク、カガボシ】 ドモコモ、マドボッチ、ボシ、カガボシ、ヤマボシ、マルボシ、オカブリ、サントク、マドボッチ、フロシキボッチ、オカブリ、ホカブリ、ホオカブリ、サンカクカブリ、サンカク、サンカクボシ、シハンコ、カクマキ 以上、『かぶりもの、きもの、はきもの』（宮本馨太郎）	
 みのぼうし 蓑帽子	頭部から身体にかけて覆う雪除け、防寒用の被り物。主に雪国で用いられた。藁や藁草、ススキなどを細長く編んで二つ折りにし、片側だけを閉じたものや、半球状の鉢の下を鍔（しころ）のように編み残したものなどがある。	カンゼンブシ			タチゴサ				x	【ぼうし】 ござぼうし、みのぼうし、かんぜんぼうし、くちえぼうし、ゆきかぶど 以上、『日本の生活文化財』（祝宮静編）	
 かさ 笠	雨除け、雪除け、日除け、または顔をかくすための被りもの。 製法で大別すると、編み笠（藁草や稲藁などを編む）、組み笠（檜や竹などを網代に組む）、縫い笠（菅、麦稈など）、押し笠（竹皮や蒲葵など）、張り笠（皮、紙など）、塗り笠（漆、油などを塗った）などがある。			カサ	カサ	イタガサ	カサ	タカンバツ、カサ、クバツ、コバツ、カサ、ムンカサ、ジュルカサ		【笠】 うちぶせ・ばちがさ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【笠】 くばーさ・ちんぶがさ・ばちちよーがさ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 あみがさ 編笠	藁草・稲藁などを編んでつくった笠。もっぱら陽笠に用いられた。 深編笠（熊谷笠・十符編笠・忍笠）、一文字、富士風、虚無僧笠（孤僧笠・天蓋）などの種類がある。	アミガサ					アミガサ、イガサ		アミガサ	【編笠】 とくまんぼ、とこまんぼー、ばおり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 すげがさ 菅笠	縫い笠の一種。スゲを縫い綴って作った笠で晴雨兼用。円盤形・円錐形・円錐台形・帽子形・半円球形・裨折形など、主に七種の型がある。	スゲガサ	スゲガサ	スゲガサ	トンボガサ	スゲガサ	スゲガサ		x	【菅笠】 さんどがさ、そーとめがさ・ゆきずりがさ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 ひのきがさ 檜笠	組み笠の一種。檜などの経木を材料とし、網代に組んで作ったもの。網代笠ともいう。杉・松・イチイなども用いる。				イタガサ、コチボラガサ	ヒノキガサ、マンシユウガサ			x	【檜笠】 ヒノキガサ、アジロガサ、イタガサ、カサガサ、キセンガサ、ギョウシヤガサ、サクラドメ、チヨッペイガサ、ドウダニガサ、ヒノキダマ、ゲキガサ、以上、『かぶりもの、きもの、はきもの』（宮本馨太郎）	
 たけかわがさ 竹皮笠	押し笠の一種。主として竹皮を材料とし、これを竹の骨組の上にかぶせ、糸・竹ヒゴなどで渦巻状に押さえ止めて形作る。円錐形・帽子形・半円球形・裨折形・桔梗形などの型がある。						ハッチガサ、タカンバツ、サ、タケノコガサ	タカンバツ、サ、タケノコガサ	x	【竹子笠】 さんばち、さんばちがさ・じゃこがさ、しんばちがさ・たかっぱり・たかなはんちよー、たからばち、たかなばち、たこーな、たつごらばち、だんべら、でんばち、とんきゅーがさ、とんごらがさ、たかっぱりがさ、たつぱりがさ、ばちかかさ、ばちばちがさ、ばちがさ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
着る物（上衣）											
 はれぎ 晴着	改まった日（晴：ハレ）に身につける衣服。普段着や仕事着（褌：ケ）と区別して用いる衣服。	アワセモンツキ、ワタイレモンツキ				アカベエ、ハレギ、ヨソユキ、イライ、ヨソツウライ、イキ、シモユキ	アカベエ、ハレギ、ヨソユキ、イライ、ヨソツウライ、イキ、シモユキ	ハレギ	ウツジ	【晴着】 アワセモンツキ・ワタイレモンツキ、アカベエ・イッチョオライ・ヨソユキ・シモユキ・ハレギ・ヨソユキ・イッチョウラ・ウツジ 以上、神野班収集	













衣









※備考欄にはあなたの地域の呼称を記入してください

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿兒島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 ふだんぎ 普段着	<p>日常身につける衣服。農山漁村では家居の際に着用する衣服を指し、仕事着よりも身丈が長い「長着」をいい、ナガギ、ナガラなどという。仕事を終えた夜間や休みの日の家居に着る。</p>	ヘーゼキモノ				フダン、ツネギ、フナガタニ、ツネギ				【不斷着】 あいぎ・あいだぎ・あいまぎ・あわぎ・あわぎもん・あわいのきもの・いっぞーちーあー・うまんぎり・おぞいきもん・おぞいば・おぞいべい・かつぎ・きすたれ・けぎ・けぎもん・けない・けなないぎ・けなき・けなげ・さして・さまぎん・じゅじゅぎ・じよしえき・じよーじゅぎ・じよーぎもん・じよーざり・じよーじゅぎ・じよーじよぎ・じよーじよぎ・じよしじよぎ・だたさぎ・ただんきもん・ちゅーまい・ちゅーせき・ちよこちよこぎ・つねぎ・つねぎもん・つねつき・どつたつていー・ながぎ・ながぎ・ながぎもん・ねんぎ・ねんぎ・はざぎ・はざらぎ・びざきしきん・びたきぎぬ・びたつすしぬ・ふたきしきん・ふたっしん・へーぜぎ・へーぜご・へーでぎ・へーじぎ・へじきもん・へぜぎ・へびら・へべら・へんじよぎ・へんじよぎもん・まぎ・やーからー・やーからちやー・やーからきいらー・やーぎ・ゆちやー・ゆつあーまー・んぬつていー 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一)	
 しごとぎ 仕事着	<p>労働時に上体に身につける衣服。動きやすく丈夫で、汚れることを前提に作られたもの。仕立ては単・袷・緋入のほか、肩入・片身替・刺子・裂織などさまざま。一般に身丈は短く、コギン、コシキリ、ハンチャ、ミチカなどと呼ばれる。また袖形も変化に富み、ハンソデ、ヒラソデ、ツツソデ、ツツボ、モザリ、マキシソデ、ネヂソデ、コイグチ、アタグチ、コテソデ、テボソデ、テボウソデ、タナシ、ソデナシなど袖の特徴が名になっていることも多い。用途による名称では、農耕時に着るものをノラギ(野良着)、海に出る者の着るものをオキギモン(沖着物)、山に入る者の着るものをヤマギモン(山着物)などという。</p>	シゴトシ、テッポウソデ、ハダツコ、デ、サシコ、コギン、サシコ、シゴジュパン			ノラジパ、ヤマギ	ノラギ、ヤマギ	タナシ、コウソデ、コウソデ、コウソデ、コウソデ、コウソデ			【仕事着】 あいぎ・いご・いごぎ・うわつぱり・うわぱり・えわつぱり・えわぱり・おぞいきもん・かせぎしよ・かせぎせだこ・かちぎしばん・こいの・こぎの・こした・こしふとん・さしもの・しかまきぬ・しかましぬ・しくらうしきん・しごつぎもん・しごつきもん・しごじしばん・しじきりやー・しほん・しほんきもの・しほん・しりきりほんてん・しりきり・しりきりしばん・しりきりほんてん・すまきぬ・すでいつきら・すでいむたつていー・ぞといきぎ・ぞとぎ・たいきぎの・たなし・たんぼぎもん・ちしれ・ちよーばき・つうびきさー・つづれ・つねぎ・でたち・でたち・でたちべ・つぼ・てつぼで・とね・ながとば・のこぎぬ・のこぎん・のんなし・はざぎ・はたけぎ・ほつひ・ほつひい・ほまいきもん・ほりかけ・ほるまぎ・ほんそで・ほんちゃ・ほんて・ほんてん・ひつぱり・ひとえでつこー・ふしんぎもの・ほつこ・まんてる・もじり・もつぱ・やまいき・やまいきぎもの・やまいきぎもん・やまいきもの・やまぎ・やまきもの・やまじもん・やまきもん・やまきもん・やまじぼん・やまがた・やまき・やまきき・やまつき・やまてちち・やまみちか・やまゆき・やんだ・よたぎもの・わつぼろ・わほり・わんぼりいしよ 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一) 【仕事着・労働着】 こしぎり・こしぎん・こすびり・こでなし・しかまきぬ・たなし・つずり・でたちべ・どんぎ・はざぎ・ほるぎん・ひつぱり・ふしんぎもの・やまいき・やまぼと・ぞんざ 【沖着物】 いせ・おきあわせ・おきぞんざ・おわんだきもん 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)	
 そでなし 袖無	<p>着物の一種で袖のないもの。胴だけをおおう最少の衣服。肌襦袢、半纏、羽織、仕事着など用途はさまざま。防寒用の縮入れのほか、冬以外に着る綿を入れないものもある。数多くの呼称があるが、なかでも袖無の仕事着はタナシ・ソデナシ・カタギン・カンキ・ツンスキなどと呼ばれる。</p>	ソデナシ			ボソシン	デンチ、デデンチ、デデンチ、デデンチ	ソデナシ、ステイチラウソデ、ウ、ニブコリ			【袖無しの半纏】 おちやつぱり・おちやつぱり・おでんち・でんこ・でんこ・でんこー・でんじ・でんじん・でんじん・でんちや・でんちゆ・でんちゆー・でんちよ・でんちん・でんつとーば・ほつひ・ほつちよい 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一) 【袖無衣】 あくひ・かつちょ・かんぎ・かんきち・かんちよ・さる・さるこ・しよつこ・せなこ・ちんこ・てんこ・どーまり・はんこ・ほいしん・ほーちん・ほんしん・ほんちん・かんこ・しよいこ・じんてこ・てらじゆばん・でんち・どーまる・どんだ・どんまる・ほつちよい 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)	
 ぼろきもの 襦袢着物	<p>破れや繕いのあるほろほろの着物。仕事着と重なる名称も多い。</p>	サンハダツコ			ボロコ	ボロ(ボロ、ボロ、ボロ)	ボロ、ツツ、フクター			【襦袢の着物】 おかざり・おびらめ・おぼろさんぼろ・きくずし・さんぼろ・さんぼろさんぼろ・しとね・せんまいわた・ぞんぼろ・つずり・つずりきもの・つずれ・どらんざー・どらんざー・どーじ・どーじた・どほー・どんざー・どんざきもん・どんざぼろ・どんざぼろ・どんだばれん・びたたいじゆん・ほーこ・ほーた・ほーたききもん・ほーと・ほこきもの・ぼた・ぼたら・ぼたれ・ぼたれ・ぼたれつきもの・ほつこ・ほつこ・ほつこー・ほつこきもの・ほつた・ほつたら・ほつと・ぼと・ぼろくそ・ぼろそ・ぼろつこ・ぼろろ・ほんざ・ほんせー・ほんぼろ・もつこ・もつぱ・やりかーふ・やりかこー・やりきん・やりじん・よいえしよ・わつぼろ・わんぼれ・わんぼれ・わんぼーだいじ 【使い古した布】 かいふ・かっこー・かこー・かっこー・かつさい・こつそ・こんざ・こんざさんぼろ・こんずんぼろ・こんぞ・さいで・しきし・じぶずーじよー・ぞんざ・つき・つきぼろ・つずい・つずら・つずり・つずりぼろ・つずれ・つずれざれ・つずれぼろ・つずろ・つれつけ・つんざれ・つんず・つんずきれ・つんずり・つんずれ・つんぼろ・とざい・とざま・どや・とんざ・とんざき・とんざきふろー・とんざぼろ・とんざぼろー・とんだ・ひろー・ふいとーふとーふとーふとろーふくとーふた・ほーたく・ほーろく・ほた・ほだこ・ほたら・ほつ・ほつざえ・ほつせ・ほつた・ほつたら・ほつと・ほと・ほどー・ほどろ・ぼろくそ・ぼろそ・ぼろつき・ぼろつこ・ぼろろ・ほんざ・ほんせー・ほんぼろ・むくぞ・もぎ・やふれつづろ・やれつき・やれつき (※使い古した布の意) 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一)	
















名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 ゆかた 浴衣	主に夏の湯上がりや普段着として用いる上下一体型、裏地無し(単仕立)の着物。もとは麻の単衣で、入浴時や入浴後に着用した湯帷子が始まりといわれる。	ユカタ			ユカタ	ユカタ、カタタビラ	ユカタ、カタタビラ	ユカタ、カタタビラ		【浴衣】じゅばん・そめぬき・はらぎ・ひらくち・もーか・ゆあがい・ゆあがり・ゆとり 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【浴衣】じゅばん・もーか・ゆとり 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 ねまき 寝巻	寝間着とも書く。就寝時に身につける衣服。着古した浴衣なども用いられた。	ヨギ				ネマキ	ネマキ	ネマツ		【寝巻】かいまき・たんぜん・ねあわせ・ねいしょ・ねいぞ・ねーしょ・ねき・ねぎ・ねぎむの・ねぎもの・ねぎよき・ねぎりもん・ねば・ねもくい・ねよき・ねんねば・ねんねんぎ・ゆるち・よぎ 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【寝衣】ねもくい・ねんねば・よかふり・かいまき・ねいしょ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 じゅばん 襦袢	和装の際、表着の下に着用する下着の総称、または仕事着の上着(表着)の呼称としても使われる。 ポルトガル語でシャツを意味する「ジバオ」が語源とされる。上下一体の長襦袢は衿に汚れ除けの半襟をつけて表着と肌襦袢の間に着る。半襦袢は肌襦袢と同じ半身衣だが、衿に汚れ除けの半襟をつけ、長襦袢同様に用いられる。胴が木綿、袖が絹など、別の素材で作られることも多い。				ジュパン、ジパン	ナガジパン	ナガジュパン	ジパン	ドゥジパン	【襦袢】おひよ・こて・こんなし・しだひきやー・しりきれ・じんべ・どんざ・どんじ・はたすけ・はんぎ・はんこ・ばんこ・ばんご 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【襦袢】ててら・どんざ・はたご・はたつけ・むんずり 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 はだじゅばん 肌襦袢	肌に直接着用する下着。 袖のある半身衣で汗取りなどと呼ばれ、晒木綿などで作られる。					ジュパン、ジパン、ケツネジパン	ジュパン、ジパン	ジパン		【肌着】あかとり・あせとり・あせはじき・かやまき・くがら・こんなし・ちやんちゃん・つばこ・つばっこ・どろしふい・ねこ・はざこ・はたご・はたごしばん・はたごこ・はらっこ・はんだこ・はんちゃ 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一)	
 うわぎ 上着	衣服の上に羽織るものの総称。 羽織、上っ張り、半纏、道行、道中着などさまざまな種類があり、主用途は防寒や塵除けだが、文字や図案を染め、職業や所属を表す目印にするなどの目的もある。									【上着】おーんぎん・じんべ・ずぶり・ひっぱり 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一)	
 はおり 羽織	上着の一種。長着の上に羽織る折衿の短衣。 外出時や改まった席で着用。明治以降、袴に代って紋付羽織・袴が男子の正装と定められ一般に広がった。飾り紐で前を結び、前開きから下の着衣が見える仕立て。	ハオリ			ハオリ	ハオリ	ハオリ	ハオイ、ハオリ		【羽織】うわぶり・えりおり・おはお・すっぽー・どろぶく・とーぶく・どーぶく・はお・ぼくい・はくり・はこり・はこり・はこり・ぼたく・ぼたく・ぼばら・ぼばら・はんちく・るぶく【羽織(羽織の古称)】どんこ・どんこ・どんざ・どんざー・どんだ 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【羽織】うわぶり・えりおり・ぼばら・はこり 【綿入羽織】どーぶく・どんぶく 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 はんてん 半纏	上着の一種。衣服の上に羽織る短い上衣。 仕事や防寒、または両者を兼ねて着用する。 羽織と似ているが襟は折れず、前身ごろの左右を結ぶ紐がない。袖は筒袖か振袖が多く、近世後期になって出現した。 印半纏、ねんねこ半纏、綿入半纏などの種類がある。	ハンテン			ハンテン	ハンテン	ハンテン、ハッピ	スズン、ハッピ	ハンテン	【半纏】いわばり・うわばり・おだばつて・けんちゃ・こてつぼ・しはんこ・しりきれ・じんべ・じんべはん・すっぽ・だるま・ちゃん・てこ・てこー・でんち・どーぎ・どーぶく・どーぶく・とーまる・どぶく・どんざ・どんぶく・はざり・はたご・ぼち・はつび・ぼて・はんかわけ・はんきり・はんぎり・はんびりも・ばんこ・はんこー・はんち・はんちゃ・はんちゃー・はんちよー・はんでつ・はんど・はんとこ・はんぶく・はんぶく・へんでこ・みちかわせ・みっか・むきみや・よしち 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【半纏】こひふり・さんば・よしち 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 しるしばんてん 印半纏	半纏の一種。仕事や防寒、または両者を兼ねて着用する。 細木綿の単衣または袷仕立てで、衿・背・肩・裾周りなどに、屋号や紋・組印・組名を白く染め抜く。筒袖で裾がなく腰丈程度。	シルシバンテン			シルシバンテン	シルシバンテン	シルシバンテン	シルシバンテン		【印半纏】かんばん・きりだい 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 ねんねこはんてん ねんねこ半纏	半纏の一種。子どもを背負うときに羽織る丈の長い綿入れの上着。	ネンネコ			ワタイレ	ワタイレ	ネンネコ、ネンネコ	ネンネコ		【子供を背負った上に着る半纏】かっこい・かっほい・からいばんてん・こいじばん・こいぎもん・こいばんてん・こいまき・こいばんちゃ・せんこ・せんこい・こんこはおり・しよーといれ・せわせんか・せんたぶつ・やんこ 【子供を背負った上に着る綿入れの半纏】こもりどんぶく・こもんばんてん・ねんねこはおり・はんこ・はんだー・はんちゃ・ぶく 【子供を背負った上に掛ける綿入】ありゃこじや・かめつこ・かめのこ・こもりどぶく・こもんばんてん・たんでん・ねんねこはおり・はんこ・はんだー・はんちゃ・ぶく 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【負半纏】あわい・おいがけ・おいぎ・おいこ・おいね・おいのこ・かっこい・かっほい・からいばんてん・こもりどぶく・こんこ・せんたぶつ・たんぶくろ・ひたご・ぶく・おいこはんでん・せわ・ひたて 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 わたいはんてん 綿入半纏	半纏の一種。防寒のため表地と裏地の間に綿が縫いこまれている。	オミンノコノコ、ミジカワタイレ			ワタイレ	ワタイレ	ワタイレ、ワタイレ、オギ、ドオ、ハンテン	ワタイレ	x	【綿入(わたいれ)】ぬのこ・ぬのこ・どーのこ・とーぶく・どーぶく・どぬのこ・どんこ・どんざ・どんざ・とんちん・とんちん・どんぶく・ばんぶー・ひらくち・ひらくち・ひろそで・ぶつききはんこ・まいすめ 【綿入の半纏】おのこ・どーとく・どーぶく・どーぶく・どーぶくばんちゃ・どつとくわたいり・どぶく・どんぶく・ぬのこ・ぬのこはんでん・ぬのこ・ぬのこ・のっこ・ぬのこ・ぬのこすっぽ・ぬのこはんでん・ぬのこ 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【綿入衣(わたいれ)】ぬのこ・ぬのこ・つのだ・おひえ・どてら 【綿入羽織】どーぶく・どんぶく 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	














衣
















名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考	
 たんぜん丹前	湯上り(浴衣)の上や防寒用に羽織る広袖の綿入れて、関東では襦袢(どてら)という。着物のほか寝間着の上にも着た。				タンゼン	トオギ、タンゼン	タンゼン	タンゼン		【襦袢(どてら)・丹前】きたんぜん・こひろ・どぶく・どんざ・どんぶく・ねまき・ぼと・もめんいしよー 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)		
 みちゆき道行	和装の上に着る外套の一種で女性用。防寒と防寒のため袴元以外をすっぽり覆い、おにも道中着とした。					ナガゴート	ハンコート、アマコート		x			
 どんざ	厚手の防寒用の衣服。厚地の木綿でできた半纏や木綿を重ねた刺子半纏や筒袖の仕事着など、実体はさまざま。ツツレやアツシ(厚子・厚司)と呼ぶところもある。アイヌがオヒョウの樹皮から織ったアットウシとの関連は不明。				ウミボッコ		ドンザ	ツツイ	フクター			
 みの蓑	植物繊維を編んで作った防寒、防風雨、防雪、日除け用の外套。腰蓑や肩蓑など体の一部を覆うものもある。稲藁・スゲ・ピロウの葉やシナ・フジ・シユロの皮などを編んで作った服物で、主として雨雪を防ぎ陽光をさえぎるために着用するほか、水にぬれたり泥土に汚れるのを防いだり、物資の運搬時のクッションなどにも利用。	ミノ、ケミノ	ヒネリミノ	ミノ	ミノ	ミノ、オオミノ、ヒラノ	ミノ、タミノ	カヤミノ、シユロミノ	ノヌ	【蓑】がさ・けだい・けでー・つら・どーみの・どみの・どもんご・のーさ・ぼんどり・ぼーりよー・みだら・めぬさ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)		
 きごさ着蓑	植物繊維を編んで作った防寒、防風雨、防雪、日除け用。蓑蓑に肩掛け紐をつけ、外出着とした。蓑蓑を横にして背に負うものは農作業の日除けに、縦に用いて体を包むものは雨や雪除けに使用されることが多い。キダラ・キゴモ・オイネガツパ、ヒミノ・ヒデリゴザ、セグラなどとよぶ地方もある。	キゴザ			アマゴザ、キゴザ、アマゴザ、シッチョ、イ、ケイ、ヒヨケゴザ、ヨコゴザ、チユロータ、セイタ、ヒツチユ	キゴザ、ゴザミノ、カツバ、ヒ	キゴザ、ゴザミノ、カツバ、ヒ	キゴザ、ゴザミノ、カツバ、ヒ	x	【蓑蓑または蓑を編んで作った雨具】ごさふし・ごさぼーし・ごさぼし・ごさみの・ごさむしる・こもせ 【蓑で作った雨具】みのぼし・みのすっこ・みのすこ・わらぼし 【蓑や菅、わらなどで編んだ、フード付きマントの形をした雨や雪の日のカッパ】みのぼーし・みのぼーす・みのぼし・みのぼっち 【蓑の日覆いに農夫が背中に付ける小さいもの】てしまごさ以上、『標準語引分類方言辞典』(佐藤亮一) 【蓑】きごも・とんびごさ・ひよけ・よこでー 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)		
 かっぱ合羽	外套の一種。布や紙製で肩に掛け、首で結んで着用する。形式は丸合羽が多く、紙に桐油をぬった紙合羽、油紙を芯にした木綿仕立ての木綿合羽は主に旅人たちの雨着とされた。	カザガツパ					カツバ、ヒ	キマワシ	x	【かっぱ】かいろ・かざまわし・かっぱぎ・からす・とーゆー・とゆー・とよ・とよ・といがっぱ・ひきまわし・ひきまき・ひきまし・ひきまつい・まる・まろ・まわしかっぱ 以上、『標準語引分類方言辞典』(佐藤亮一) 【雨合羽】あまばおり・じゅーりーがっぱ・とい・みのぼし・もめんがっぱ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)		
 とんび	外套の一種。明治以降、合羽に変わって重宝され、トンビ、インパネス、二重マントなどと呼ばれた。	トンビ				マント、ト	マント、ガ	ンビ		【マント】つる・ひきまわし・ひきまき以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)		
 かくまき角巻	外套の一種。房のついた毛布の類で、頭や肩から掛けて全身を覆う厚手の布。マントのように装着する。	カクマキ				カクマキ、ケ	タルマ、ケ	ケ	x	【角巻】フランク、ケット、以上、『かぶりもの、きもの、はきもの』(宮本駿太郎)		
着る物(下衣)												
 はかま袴	両脚の部分が二股に分かれた下衣。単に「袴」という場合、羽織と並ぶ男子の和服礼装のひとつを指すことが多く、上衣の裾を着龍めてゆったりと下半身を覆う。その他、小倉袴、馬乗袴、行灯袴、山袴(仕事袴)、洋袴(ズボン)、下袴(ももひき)など、用途によりさまざまな形態がある。	ハカマ	コバカマ	ハカマ	ハカマ	ハカマ	ハカマ	ハカマ	x	【袴】いんぎんぶくろ・ざばかま・さちばかま・しも・すぞ・ぞぞ・ましたか・まざか・まちだか・まちだか・ましたか 以上、『標準語引分類方言辞典』(佐藤亮一) 【袴】いんぎんぶくろ・しも・じんぎぶくろ・まちだか・いんぎぶくろ・すぞ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)		
 やまばかま山袴	袴の一種で一群の地方的な袴の総称。現在正装に際して着用される座敷袴に対し、地方農村などで日常生活、または農耕その他の作業に際して着用。タチツケ・モンベ・カルサン・ユキバカマ・サルバカマ・フンゴミなどと呼ばれる。	ハカマ、カ	デタチタツ	リアゲ、ユツケ	ツツケ	ツツケ、ホ	ソツバカマ	ヤマバカマ	ハカマ	x	【山行きの袴】いっかま・えったくた・えったくた・えんざくざ・おーくちばかま・おーくちばかま・かつたち・ののばかま・ののばかま・のらばかま・まちだか・ゆきばかま・よきばかま 以上、『標準語引分類方言辞典』(佐藤亮一) 【山袴】えったくた・おんぐり・かかどさん・かるさん・こばかま・こみこみ・さんばく・たっつけ・だんぶくろ・ふんこみ・へが・ほんばかま・またしやれ・もくたれ・うんぐり 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 たっつけ裁着	山袴の一種。四布型で後布がきわめて短小。膝下の部分が一布であり、もっぱら方形裾(はこまち)であるのが特徴。腰はゆるやかに膝下がびたりしており、現在も相撲の呼出や芸者の手古舞姿などに見ることができ。					タツツキ	タツツケ	パツチ	x	【作業袴】うまのりばかま・おっぱらばかま・さる・さんどく・たじつけ・たすけ・たちつけ・たちつけ・たちばかま・たつき・たつきばかま・たつけ・たつち・たっつけ・たつち・むくずり・むくたれ・むくずれ・むくたれ・もくべ・もんべー 以上、『標準語引分類方言辞典』(佐藤亮一)		
 もんべ	山袴の一種。左右一対の前布・後布から構成される。後布の短小なタツツケから、長大となるカルサンへ中間に位置する。仕立てがゆるやかなので長着物のままでも装着できる。第二次大戦中に家庭婦人の防空着・作業着として婦人団体がたいに奨励し、広く全国に普及した。	モンベ、フ	タユツコギ		モンベ	モンベ	モンベ	モンベ	モンベ		【もんべ】あねこもつべ・いっかま・えちやまか・かかとさん・かつさん・がふら・からさん・かりさん・かるさん・さんこばかま・さるばかま・さるまた・さんどく・たちあげ・たちかけ・だふら・だんぶくろ・ののばかま・ののばかま・のらばかま・はかま・へが・へば・またしやれ・またしやれ・まっくれ・まっくれ・むくもこ・やえんばかま・ゆきばかま・よきばかま 以上、『標準語引分類方言辞典』(佐藤亮一)	

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 かるさん 軽衫	山袴の一種。タツケやモンベに比べ、後布がたっぷりとつてある。すそにひだをとってくり、横ぎれの筒状の裾継ぎをつけるのを特徴とする。古くは括袴(くくりばかま)といわれたが、安土桃山時代ごろから「かるさん(軽衫)」の名で呼ばれた。					カルサン	カルサン	×	×	【上部を緩やかに、下部を締めた、労働用、あるいは防寒用の袴】かっさん・からさん・かりさん・かるさん・さんばく・もっこもっこ 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【カルサン】カシラン・カッサン・カラサン・カリサ・カリサン・カルサ・カルン・カサンなど 以上、『かぶりもの、きもの、はきもの』(宮本馨太郎)	
 ももひき 股引	両脚の部分が二股に分かれた下衣。山袴のような後腰はないが、左右の前布の筒部にそれぞれ足を通し、右後布を下に、左後布を上重ねて臀部を包み、紐を結んで着装する。男性用の下着のほか、野良仕事の際に女性が着用する表着としてのモモヒキもあった。関西では丈の長いものをパッチ、作業用の丈の短いものをモモヒキといい、関東では縮緬や絹製のものをパッチ、木綿製を素材に限らずモモヒキと呼んだ。	モモヒキ	モモフキ	モモヒキ	モモシキ	モモヒキ、ソオモモヒキ、ハンモヒキ	パッチ、モ、ソオモモヒキ			【股引】あしく・あつぷ・いんぐりまた・おしんばつち・こした・さるまた・じんたら・ばー・はかま・はだももひき・ばち・ぼつち・ぼつち・ぼつちー・ぼつちり・ふみごみ・ふんごみ・ふみご・ふんごみ・ふんごみ・ふんばり・べつち・まわせ・むむぬき・むむぬし・むむぬち・もつけ・もつべ・ももざい・もんぐら・もんべ・もんべ・わつち 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【股引】あつぷ・いんぐりまた・ふみご・じんたら・ふんごみ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 こしまき 腰巻	着物の内に着装し、腰部に巻きつける布片の下衣で、主に女性用の下着。作業時に用いることもある。蹴出・裾除など称し、湯文字・二布の表に着装した。現在は湯文字や都腰巻なども包含して、婦人の腰部にまとう服物の総称となっている。「オコシ(お腰)」は丁寧で上品な呼称。	コシマキ			オコシ	フンドシ、オコシ、コシマイ	コシマキ、コシマキ、メダレ、シタム	×		【腰巻】おなごへこ・おなごんへこ・おへこ・おやつほ・おんなのふんどし・かいまき・こしま・こんま・こしまえ・したのおび・したのび・しためたれ・ひためたれ・しめし・すせいき・すせよけ・たずな・つりまーし・とーさぎ・なかなかね・はだのおび・はもじ・ひごめ・ひまき・ひも・ふんどし・ふんどし・へけ・へこ・べつち・へんどし・まき・まはし・みみぬい・みんみ・めたれ【女性の腰巻】あん・いとり・いまき・えとり・えまき・きやく・おゆく・おゆき・きやく・きやく・きやく・きやく・したいほ・したいほ・したいほ・したむん・したもん・したもん・そぞひき・ちゃっほ・はだすい・はだせ・はだぞ・はだぞえ・ひたんもん・めんな・ゆく・ゆとり・ゆまき・よこ・よとり・よまき 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【腰巻・濁巻】えとり・おやつほ・かひ・かいまき・かかん・きやく・きやく・けだし・こしまえ・したいほ・しためたれ・したのび・すせいき・ちりまーし・なかね・はだぞえ・ひごめ・ひためたれ・ふごめ・ふたの・めーちや・めだれ・ゆく・ゆもの・よまき・おきやく・とーさぎ・はもじ・はらぞ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 ふんどし 褌	男性の股間を覆う下着。一連の帯状の布片で、股間から腰部に巻きつけて着装する。六尺褌、越中褌、もっこ褌などの種類がある。	フンドシ			フンドシ	ロクシャク、フンドシ、マワシ、モッコ	フンドシ、マワシ、ハコ			【褌】いまき・うちおび・おとこゆもじ・きんかくし・けつわり・けつわりきんかくし・こばかま・さげ・さない・さなぎ・さなじ(単称)・さなん・さねー・さねん・さんじゃく・さんじゃくおび・したのおび・したのび・したもん・したゆで・しりまき・たずな・たんな・たんな・ちべこ・ついだんな・つりさなぎ・つさぎ・つっべっこ・つりふ・つりふごめ・てこ・てっこ・てでら・はたおび・はたのおび・はたのび・はたのふ・はたのふ・はたのふおび・はたのふおび・はたのふおび・はたのふおび・ふごめ・ふんごめ・へこ・へこおび・へこの・ほすほー・ほんごめ・まーひ・まおし・まし・まつし・まやし・まわし・まわしふんどし・ろくしゃくへこ 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【褌】うちおび・きんかくし・こしまき・こばかま・さない・さなぎ・さなじ・さねー・さるももひき・したゆで・たふさぎ・たんな・てこ・てでら・とーさぎ・ねじまわし・はたのび・ふごめ・ふたの・ふんごめ・へこ・へこし・まわし・もっこ・たふさぎ・はたおび・はたのび・はどーび・ひごめ・まわし 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 ろくしゃくふんどし 六尺褌	「褌」の一種。並幅の布を6尺(鯨尺で、約230cm)ほどに切ったもので、略して「ろくしゃく」などと呼ばれる。農村や漁村では、第二次大戦まで男性のふつうの下着で、これひとつを身につけて仕事をすることも多かった。	フンドシ			フンドシ	ロクシャク、フンドシ	ロクシャク、フンドシ、フンドシ、モッコフ、ドシ	サナジ			
 えっちゅうふんどし 越中褌	「褌」の一種。3尺(鯨尺、約114cm)ほどの布に紐をつけ、紐を腰に巻いてうしろから股を覆い、紐の下をくぐらせて余った分を前に垂らして着装する。越中褌をもっと簡略にし、陰部を覆うだけの布を用い、脇腹で結ぶもっこふんどしもある。					エッチュウ、フンドシ、サンジャク、フンドシ	エッチュウ、ハコ	サナジ	【越中褌】いーさない・えとべこ・おりべふんどし・おろっべふんどし・さなぎ・ちりさなぎ・つっべっこ・ひっこみふんどし・むぞー・もっこ・もっこふんどし・やっちらべこ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編) 【越中褌】ツイダンナ・ツリフゴメ・ムソイ・イターシー・スコシ・ドモコウなど 以上、『かぶりもの、きもの、はきもの』(宮本馨太郎)		
着る物(その他)											
 おび 帯	幅が狭く丈の長い一筋の服物の総称。帯を巻き結ぶことで、着物の前を押える役割がある。男帯には角帯・兵児帯・三尺など、女帯には幅広帯・半幅帯・単帯・丸帯・袋帯・昼夜帯・名古屋帯・伊達巻などがある。	ホロオビ、ヤマオビ	オビ		オビ	オビ、スコ、オビ、キ、ヤマオビ	オビ	オビ	ウービ	【帯】おつほ・おもし・きぎび・きぎゆふ・きぎ・きゆび・きゆび・さじ・しくび・しごき・すなおび・たずな・たんな・ちちゆび・てでら・どん・び(幼児語)・びー・びくい・びくん・ひごき・ひごき・ふし・ふくび・ふくび・ふし・ほーし・ほし 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【帯】きぎ・さじ・しくび・たずな 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 ちゅうやおび 昼夜帯	女性用の帯の一種。表と裏とがそれぞれに地質・色目・文様を異にしたもので、片側帯、腹合帯、鯨帯ともいう。お太鼓やひっかけなどに結び、もっぱら平常用。									【腹合せ帯】うちあわせ・ふつかおび 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【昼夜帯】カタガワオビ、ハラアセオビ、クジラオビなど 以上、『かぶりもの、きもの、はきもの』(宮本馨太郎)	



















衣

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 ぼろおび 襦袢帯	帯の一種で、野良着・仕事着用。ごつごつとした裂き織りなどで作られ、結び目が解けにくい。	オリオビ					ヒモオビ、サッコリオビ				
 こしひも 腰紐	帯の類で帯よりも量的に細く小さいものは紐とも呼ばれ、腰紐(腰帯)・帯揚・帯留などがある。腰紐は帯を上げて着丈を調節し、着物の打ち合わせを留めるために締める。	コンヒモ				コンヒモ、コンヒボ	コンヒモ			【腰紐・腰帯】おびし・かかえおび・からげ・くりあげ・しき・すしよー・たんな・はしよおび 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)	
 へこおび 兵児帯	縮緬や絞りなどの柔らかい生地をしごいて締める幅広の帯。普段着の着流しに着用。薩摩兵児が締めていたのが名の由来とされる。	へこオビ					へこオビ、オトコオビ			【へこ帯】たくり・ながてのこい・ひすこき・ひっごき・ひろて・ぼーし・すくいーび・ふーし 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)	
 たすき 褌	着物の袖が作業の邪魔にならないように押さえる紐。一端を口に加え、脇の下から背にかけて8の字を描きながら袂をからげたり、両端を結んで輪にしたあと肩から脇へ斜めに「片たすき」にするなど、着法はさまざま。	タスキ			タスキ	タスキ	タスキ	タスキ		【褌】あじまき・あじやまき・ごがつたすき・たちこ・たんこ・ゆだすき 以上、【標準語引分類方言辞典】(佐藤亮一)	
 うでぬき 腕貴	二の腕に装着し、手腕の活動を軽快にし、装飾や保護の役割を果たす。腕に巻いて紐またはコハゼでとめるものと、腕を通す筒形のものなどがあり、昆虫や茨の害を避けるほか、陽除け、汗除けにもなる。		ソデカフ			ウデヌキ		x	x	【腕貴】ウデヌキ・ナガテオ・テヌキ・ユカケなど 以上、【かぶりもの、きもの、はきもの】(宮本駿太郎)	
 てっこう 手甲	手の甲および腕の覆い。もっぱら屋外の労働に際して外傷・寒気・日射を避けるために用いる。	テッコウ、コテ	コテ	テッコウ		テッコ	テッコウ、コテ、テサシ、テオイ	テッコ	x	【手甲】いがけ・こーかけ・てーなー・ておい・てぼし・てさし・てだぬき・てつか・てっこ・てっかいし 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)	
 てぶくろ 手袋	手部の覆い。手甲とひと続きになったものもあり、形態上からも呼称からも、手甲と手袋の区別は難しい。親指とその他の指とが二股に分かれるものと、五本指が独立したものがある。		テカフ	テブクロ	テブクロ	テブクロ			x	【手袋】うでぬき・ていぬしー・ていぬす・てさし・てずつ・てつつ・てつか・てつかし・てっこ・てつばめ・てとー・てどら・てぬき・てび・てべ・てほい・てほし・てぼつか・てわら・てんぼ・てんぼ・ゆびぬき 以上、【標準語引分類方言辞典】(佐藤亮一) 【手袋】いびぬき・うでぬき・てくつ・てずつ・てっこ・てつつ・てぬき・てほし 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)	
 えりまき 襟巻	首周りを保護するためにつける覆い。主に防寒などの目的で首に巻く。一般には毛皮、布地、編み物の長襟巻をさすが、広くは頭から首を覆う毛唐(けつとう)や、首から肩を覆う角巻(かくまき)など、風呂敷状のものも含まれる。長襟巻が用いられるようになったのは明治に入ってから。					クビマキ	クビマキ			【襟巻】えりもくい・えりもつり・くーまき・くびまき・くびまき・くびまく・くびまくい・くびもくい・くびもつり・くぶまき・くるまき・くんびり・くんまき・しかんまき(薄い色絹を三角形に折って首に巻きつける襟巻)・ひきまくい・ひきまくり・ひるまく・ふびまき 以上、【標準語引分類方言辞典】(佐藤亮一) 【襟巻】しかんまき 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)	
 せあて 背当	農作業などの労働の際、背中につける衣類をいう。羽織ると直射日光が遮られ、涼しく感じることから日除けとしても用いられる。運搬用の背当とは別。	ヒデリゴモ	セナカフ	セナカミノ	ジューロータ	セナカミノ、ニタレ				シカタ	
 むねあて 胸当	胸から腹にかけての覆い。腹掛(はらがけ)ともいい、仕事で、胸から腹を保護するために着けた。前に大きな袋がついているものもある。		ムネアテ、マエカフ			エドハラマキ、ムネアテ、ハラアテ、ヨドハラ					【腹掛】したつ・ずたつ・ちがけ・はらて 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)
 まえかけ 前掛	体の前面の覆い。衣服の汚れを防ぐため下体の表に着装する。古くは前垂(まえだれ)と呼ばれた。一般に一幅の布帛に紐を付けて作るが、地方によっては二幅・三幅・四幅など幅広のものもある。	マエカケ			マイカケ	マイカケ、マイダシ、ヒトハバ、ヒトハバ、ン、ミタテ、マイカケ、ミハバマイダシ	マエカケ、マエダレ	マエカケ		【前掛】おさかや・かいかけ・ひじゃで・おんじやで・まいあち・まいか・まいかー・まいき・まいめだれ・まえめだえ・まえめだれ・まえあて・まえて・まえふい・まえふり・まえふりこ・まやて・むなかけ・むなかけ・むなかけまえかけ・むなやまで・むらかけ・めふる 以上、【標準語引分類方言辞典】(佐藤亮一) 【前垂・前掛】まいき・まえあて・まえふり・めだれ 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)	
 こしみの 腰蓑	蓑の一種で、腰部を保護する覆い。一般に長方形に編まれた蓑を胸部・腰部に巻き、その両端上部に付けた紐を結んで装着する。	タゴシラエ、マイカケ、マエカケミノ、マイカケミノ、コシミノ						コシミノ	コシミノ	x	
 しりあて 尻当	野良仕事や山仕事の際に腰につけ、休憩時に尻の下に敷く。座布団状のもの、襦袢を縫い合わせたもの、毛皮などがある。	シリシキ				シリカワ					
 はばき 脛巾	脛部に装着する覆い。中世以降に脚絆の語があらわれ、西日本では脚絆のみを使い、本州中央部では同義のものとして併用、東北日本では布帛を縫ったものが脚絆、植物の茎葉を編んだものが脛巾とされる。	ハバキ	ハンバキ			ハンバキ、ハバキ	ハバキ	x	x		
 きゃはん 脚絆	脛部に装着する覆い。中世以降、脛巾に代わって使われるようになった。	キャハン	キャハン	キャハン	キャハン	ハンバキ、ハバキ	キャハン	キャハン			

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 つまかひ 爪革	下駄や草履のつま先につける覆い。雨雪除け。					ツマガケ	ツマガケ	x	x	【爪革】つまあさ・つまか・つまぐつ・つまけ 【足駄の爪先に掛ける爪革】さきかわ・さきがわ・さっかわ 【下駄の爪革】さきがけ・はなかわ・はながけ・はなかわ・はながわ・はなつかわ・むこーがけ・むこーがわ・むこがけ・むこがわ以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【爪革】さきがけ・さきかわ・つまがけ・つまご・はながけ・はなかわ・むこがけ・むこーがけ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 つまかけ 爪掛	つま先につける防寒用の覆い。藁製や刺し子などがあり、草鞋にかける労働用が多い。指股の分かれたものもないものがある。	オソフキ、ツマガケ	ツマガケ			シャナクミ	ツマゴ、ツマガケ	x	x		
 こうがけ 甲掛	足の甲部に着装する覆い。素足に草鞋をはく際、草鞋の紐で足をすり傷めるのを防ぐために併用する。足袋の底を取り去ったような形態。	コウガケ				コオカケ	コオキヤハシ	x	x		
 かかとかけ 踵掛	足の踵につける覆い。	シブツカラミ						x			
 わかんじき 輪標	雪に踏み込まないよう履物の下に装着する道具。深雪に埋まらず、雪で滑らない。木や竹を曲げて、輪にし、あるいは簀子状に並べて、その上に足を乗せる乗緒をつけ、さらに脊に結束する結緒をつけた。	ワカンジ、カンジキ、マルカンジキ	カンジキ			カンジキ、ウシカフ	カンジキ、カンリキ	x	x		
 てつかんじき 鉄標	標の一種で鉄製。雪水上を歩行する際に、滑り止めのため履物の下に装着する。	カナカンジキ	カナカンジキ			ガンリキ		x	x		
 ふみだわら 踏俵	新雪を踏み固めて道をつけるのに用いる雪踏みの履物。稲藁やガマを円筒形の俵に編み、内底に藁沓や下駄・草履などを取りつけた。							x	x		
持ち物											
 かさ 傘	雨や日差しをよけるために用いる柄付きの覆い。サンガサともカラカサともいう。			カサ	カサ	カラカサ、タガサ、ハンガサ、ジャノメガサ		カサ	サンガサ	【傘】あまふた 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【傘】さしがさ・さな・こんこ（児） 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 あまがさ 雨傘	傘の一種で雨天用。日本の和傘は傘骨に和紙を張り、柿渋を塗って作った。子供用の三六（さぶろく）、番奴、番傘、蛇の目傘などの種類がある。						ハンガサ、ジャノメガサ	ハンガサ		【雨傘】こっこ・さしかさ・さしがさ・とんやぼり（大きなもの）・ぼらぼら 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【こうもり傘】かぶりさな・らんがさ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 つえ 杖	歩行の助けに携える細長い棒。堅くて丈夫な素材で作られる。					ツエンボ		ツエ	ダーサン	【杖】くさき・くさん・くしゃん・くさねい・くさん・くしゃに・くしゃぬ・くしゃみ・くしゃん・せんぼー・ちーぼ・ちえぼ・ちえばい・ちえぼ・ちえんぼ・ちえんぼ・ちえんぼー・ちよぼ・ちんばい・つえつさぼ・つえつぼ・つえばい・つえぼ・つえぼー・つえんぼ・つえんぶ・つえんぼ・つえんぼ・つえんぼー・つえぼー・つっくぼ・つっくぼー・つきんぼ・つべ・つぼ・つよぼ・つよのぼー・つよぼー・つよんぼ・つよんぼー・つれぼ・つんぼ・てーぼ・てぼ・ぶくと・ぼーなー・ぼきと・ぼくと・ぼくとー・われ以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【杖】がさん・くさねい・くさみ・くさん・くしゃむ・こーしゃん・せんぼー・てぼ・ぼくとー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 せんす 扇子	あおいで風を起こし涼をとるために使う道具。末広ともいう。折り畳めるのが特徴で、折り畳み式の扇は日本で発明されたものとされる。					センス	センス	センス	オージ		
 ふろしき 風呂敷	持ち物を包んだり、上から掛けたり、下敷きにするための布。手拭い同様、頭部の覆いとすることもある。	フロシキ			フルシキ	フルシキ、オオフロシキ、玉巾イ、ツタテのヌ、ヌ、ノ、ヌ、ヌイ、ヌ、ヌ	フロシキ	フロシキ	ウチュクイ	【風呂敷】いたん・うしび・うちゆき・うちゆくい・うちゆくいー・うちゆつきー・うつばい・うつー・うつくい・うつすい・うつちゆい・うつつひ・うつばい・うつふい・うつふい・うちび・おーげんたるー・かげの・かるしき・こつみ・ちじうすばい・つつみ・つつむ・つつめ・てーたん・てふるしく・てぼる・てゆーたん・ぼんかけ・ぼんかち・ひらいた・ひらいたん・ふくさ・ゆーたん・ゆたん・よたん・わんかけ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【風呂敷】うちゆき・つぱい・おちよくいー・かげの・てーたん・てふるしき・ひらいたん・ゆーたん・ゆたん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 きんちゃく 巾着	口を紐で締めるようにした袋物。主として金銭を入れ、腰に提げた。丸形が多いが、形・大きさ・素材はさまざま。	キンチャク	キンチャク			キンチャク	キンチャク、オブク、マイブク、ロ、シソゲ、ソブクロ	コンソソ		【巾着】こぶくろ・こんぶくろ・だら・だらこ・つつみ・ふーづー・ふーぞー・ふぞー・ぼーぞー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考	
 さいふ 財布	金銭・紙幣を入れておく袋。紐で首から下げたり、懐中にしまった。巾着、紙入、守袋、旅では小銭入の早道も利用され、明治以降は口金がついたがま口、西洋式の札入も広まった。	サイフ				ドオマキ	サイフ			【財布】 かいちゅう・さんとく・じんふくる・じんふくる・ぜせいれ・ぜにだら・ぜんふず・ぜんふぞー・ぜんふくろ・ぜんふぞ・たす・たばこいれ・たふ・どーらん・どっべ・どっべー・どんぶり・びつき・びつらん・ふーぞー・ふぞ・よいちべー・わんぐち 【布の財布】 じんきら・すずふくろ・すずこんぶくろ 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一) 【財布】 さんとか・ぜんふぞ・どんぶり・よいちべー 以上、【標準語引き方言辞典】(東條操編)		
化粧・結髪												
 てかがみ 手鏡	男女の結髪・化粧に用いる柄のついた鏡。古来青銅製だったが、江戸末期に鏡面がガラス製となり、枠と柄が木製の鏡がつくられるようになった。二つ対にして合わせ鏡にして用いることもある。	テカガミ				テカガミ、カガミ、エ、カガン、アワセカガミ	カガミ	カガン		【鏡】 めいけい 以上、【標準語引き方言辞典】(東條操編)		
 きょうだい 鏡台	鏡を立てる台。古くはカガミカケという。近世まで一般に、大小2個の木枠を組み合わせ、脚部を開いて鏡を置くものが用いられた。	キョウダイ				キョウダイ	キョウダイ	キョウダイ	×	【鏡台】 かみばこ 以上、【標準語引き方言辞典】(東條操編)		
 くし 櫛	髪をすいたり、整えたり、飾りにしたりする道具。	クシ				トキグシ、スキグシ、ピンウカシ	クシ	クシ	サバチ	【櫛】 うつつい・さーき・さばき・さばきー・さばら・さばつくし・すいとーし・すじして・すじとーし・すじゆり 【長い柄のある櫛】 すいとし 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一) 【櫛】 さばき・さばら 以上、【標準語引き方言辞典】(東條操編)		
 こうがい 筭	髪をまとめたり、髻に挿したりして用いる棒状の髪飾り。	コウガイ				ネジカエボウ、コウガイ	コウガイ			【筭】 ほせ・よーがい 以上、【標準語引き方言辞典】(東條操編)		
 かんざし 簪	女性用の髪飾り。古くは自然の草花をそのままさした。	カンザシ				カンザシ、カンザシ、タマカンザシ	カンザシ	カンザシ、シーフアー	キハ	【簪】 かんかん・ぎーば・ぎずーば・ぎは・ぎふあー・じーばー・とうんぐし 以上、【標準語引き方言辞典】(東條操編)		
 みみだらい 耳盥	歯を黒く染めるための道具。お歯黒道具。お歯黒を染める液が苦いのでうがいをし、その水をあけるのに用いた。左右に耳状の手のついた盥で、多くは漆器であるが、銅製もある。						ミミダライ、イ、オハダ、ロワフ		×	【盥】 はんぞー・みみだらい 以上、【標準語引き方言辞典】(東條操編)		
 せつけんぼこ 石鹸箱	石鹸を入れる容器。石鹸は明治以降に普及したもの。携帯用は蓋付き。											
 かみそり 剃刀	髪、ひげなどをそるのに使う小型の刃物。常片刃で刃は薄く、平面的できさきがない。						カミソリ	カミソリ	カンソイ	カンスイ	【剃刀】 あたりがね・さかい・せい・そーり・そり・なめぼー 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一) 【剃刀】 そり 以上、【標準語引き方言辞典】(東條操編)	
 つめきり 爪切	手や足の指の爪を切り整える道具。小形の鋏形のものや、爪の形に合わせて刃先に反りをもたせたものもある。						ツメキリ、バサミ		ツメキ			
 みみかき 耳搔	耳掃除の道具。耳垢を掻き取り、耳穴を掻くのに用いる。長い柄のついた極小の匙形のものや、柄の先に綿毛やネジ状のものをつけたものなどもある。						ミミカキ		ミンクジイ		【耳搔】 みみくじり 以上、【標準語引き方言辞典】(東條操編)	
洗濯・裁縫												
 せんたくいた 洗濯板	洗濯物をのせてこすり洗いをしたり、ブラシで叩いたりする台に使う板。明治期に入ってきた西洋洗濯の道具で、ガラス製のものもあるが多くは木製。片面は平面、もう片面に刻み目のあるもの、両面とも刻み目になっているものなどがある。	センタクイタ				センタクイタ	センタクイタ	センタクイタ	センタクイタ			
 せんたくだらい 洗濯盥	洗濯物を入れて洗うための容器、大きめの盥。箆筒・長持・担桶(たご)・盥に数えられる花嫁道具のひとつ。盥には日常の食器を洗う桶、米研ぎ桶、魚洗桶などがあり、洗うものによって大きさ、形が異なる。	ハンソ				タライ	タライ	タライ、セ	センタクダライ	ミジクブサー	【洗濯盥】 げし 以上、【標準語引き方言辞典】(東條操編)	
 はりいた 張板	洗って糊をつけた布帛を張り、乾かすのに用いる板。着物を解き、いったん布に戻して洗う洗濯法を洗い張りといい、最後の糊づけの際、布をびんとさせるために板に張った。麻や木綿、平織りの紬地などの洗い張りに用い、上質の絹ものでは使わない。一般に長さ2m・幅40cm・厚さ1.5cmほどの板が使われた。	ハリイタ				ハリイタ、ノリツケイタ	ハリイタ	アライハリイタ				
 しんしばり 伸子針	染織や糊張りなどの際、布幅を引っ張り、均一に広げるための道具。張り板を使った板張りに対し、伸子張りといい、上質な絹などで用いられた。竹ひごの両端に小さな針を埋め込んだ形状。伸子張りではまず、長い布の両端を張手という爪付きの板で挟み、紐で引っ張って棒や立ち木に括りつけて空中に張る。次に、布幅を均一に広げるため、この伸子を数多く、左右に弓を張るように差し渡す。					シンシ	シンシ、ハリボウ	シンシ、シンシ、ハリボウ	シンシ、アライハリイタ			

衣

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 物干竿	物を干すための道具。衣類、洗濯物のほか、山菜、綱類なども干す。棒状や鉤状などがあり、竿を掛ける股状の道具も使われる。					モノホシ	モノツリ	センタツザ、オ			【物干竿】 かけそ・かけざお・からさお・からだけ・きもんほし・きもんほしざお・きんかけざお・きんかけぼー・きんざお以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一) 【物干竿】 かけざお・からさお 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)
 せんたくばさみ 洗濯挟	布類を物干しに掛けて干すとき、風にあおられたり、何かのはずみで落ちないように留める道具。					センタクバサミ					
 おしめほし 襦袢干	上におしめをかけて干すドーム状の枠。こたつの上においたり、火鉢の中に入れて干して乾燥した。	オシメホシ					アブリカゴ	x	x		
 きぬた 砧	織った布または洗濯した布や着物をたたいてやわらかくし同時に目をつめて、つやをだすのに用いる道具。						ヨコツチ、チンタ コツチ、キ ヌタ				【砧】 いたぶ・いたぶやま・うちばん・ぎんだし・じょーぼ・つち・てずち・てんころうち・ならしばん・よーしばん 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)
 ひのし 火熨斗	衣類などのしわを伸ばしたり、形を整えたりするのに用いる道具。裁縫後や洗濯後の衣服の仕上げに使った。古くは、浅く底の平らな金属製の円形火入れ容器に柄をつけたもので、これに炭火を入れて使用した。	ヒノシ			ヒノシ	ヒノシ	ヒノシ、ヒノシ オコシ				【火熨斗】 うつとー 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)
 アイロン	衣類などのしわを伸ばしたり、形を整えたりするのに用いる道具。裁縫後や洗濯後の衣服の仕上げに使った。目的や使い方は火のしと同じだが、アイロンは英語の「鉄」が語源であり、明治時代に日本に入ってきた形状のものを指す。底が平らで先の尖った金属容器に熱源(炭火や電熱)を入れ、その熱で布などの皺や縫い目を伸ばす。	アイロン			アイロン	アイロン	アイロン	アイロン	アイロン		
 きりふき 霧吹	液体を霧状にして吹きかけるための道具。水入れの上部の筒を口で吹いて散らすものや、電球状の胴に水を入れ上部を押すと霧が出るものなど、形状はさまざま。										
 くじらじゃく 鯨尺	裁縫用のものさし。鯨尺の1尺は約37.5cmで、曲尺の1尺2寸5分に相当する。	クジラジャク						クジラジャク			【鯨尺のものさし】 ごふく・ごふくものさし 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一)
 へらだい 箆台	裁縫用具。布帛をのせて筥筋をつけるのに用いる台または敷板。					へらだい					
 くけべら 紵箆	和裁で寸法を標すのに用いる箆。先端に丸みをもたせた縦長の箆で、手に握り先を布に押しつけて擦るように標しをつける。			へら		へら					
 さいほうこて 裁縫鋏	縫代を割ったり、折山の始末をしたり、先端でへら印をつけたりするのに用いる鉄製の焼鋏。火鉢の炭火などで鋏を熱し、あて布をしてあてた。一般に先細の平らな金属に長い柄をつけた形状。	コテ				コテ	コテ	コテ			
 たちいた 裁板	裁縫用具。布帛の箆つけ・裁断に用いる台。布を裁つときに用いる脚つきの台。					たちばん		たちいた			
 いとまき 糸巻	糸巻き。裁縫に用いる糸が乱れないように、また、使いやすいうように巻いておくもの。長方形のなかほどをややくした板。					イトマキ		イトマキ	ワク		
 はり 針	布などを糸で縫い合わせるために使う道具。一般に、先端がとがり、一端に糸を通す穴のある鋼製の小さな細い棒をいう。					ハリ		ハイ	ハーイ	【針】 いげ・しくしく・ちんのーいばーい・ちんのーやーばーい・はねがり・はねがね・はねがね・はねがね・びず 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一)	
 はりやま 針山	使わない針を刺して収納する小座布団。ボロや綿のほか、髪の毛を布で包んだものもある。髪の毛で針が錆びず、針通りがよくなった。					ハリヤマ			x		
 ゆびぬき 指貫	裁縫用具。指にはめ、針の尻を押して縫い進めるために使う。					ユビヌキ			x	【指貫】 うびんがに・うぶんがに・さらてがわ・さらてがわ・しごとゆびわ・つまてがわ・てがわ・てがわ・てがわ・てがわ・てがわえし・てっこ・てぬき・ゆびがね・ゆびがわ・ゆびさし・ゆびはめ・ゆびわ 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一) 【指貫】 しごとゆびわ・てがわ 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)	
 くけだい 紵台	布がたるまないように布帛を吊っておく道具。台板に棒を作り付けにしたもの、台板と棒とか折りたたみできるもの、台板に棒を差しはさみできるもの、裁縫箱を棒を取り付け台の代わりにしたものなどがある。紵け台、針山前台 など。	クケダイ				ハリダイ、クケダイ	クケダイ	クケダイ			
 さいほうばこ 裁縫箱	裁縫に必要な道具を入れておく箱。上部に和裁に必要なくけ台を取り付けたものもある。主要な裁縫道具は、針・糸巻・指貫・箆・はさみなど。	ハリバコ		ハリバコ		アマダイ、ハリカゴ	アマダイ、ハリサシ、ハリバコ	サイホウバコ		【針箱】 あまだい・あまむろ・はーさし・はりさしめ・はりさしぼこ・はりぼんこ・はりやしめ・はーやしめ 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一) 【針箱】 あま【裁縫箱】 ざもばこ 以上、【標準語引分類方言辞典】(東條操編)	